

病理解剖について

病理解剖とは、亡くなられた患者さんのご遺体を肉眼で直接観察し、さらに取り出した臓器から作製した組織標本を顕微鏡で観察することで、病気についての最終的な診断を行う一連の医療行為を指します。

現代の医療では、CT や MRI をはじめとする画像診断、さらには遺伝子解析が著しく発達しており、身体を直接観察しなくとも、内部の状態をかなりの精度で把握できるようになりました。

しかしながら、患者さんの臓器や組織を直接観察し、全身の状態を確認する病理解剖の価値は、現代においてもいささかも失われていません。解剖は患者さんが亡くなられてから行うため、ご本人の治療には直接つながりませんが、病気がどのような状態であったか、治療の効果はどれほどだったのか、生前に認識されていなかった病気がないかななどを調べることで、全身状態の最終的な評価を行うことができます。また、解剖によって明らかになった事実や新しい知見は、同じ病気に苦しむ他の患者さんの治療へとつなげることも可能となります。

以上のことから、病理解剖は、患者さんが医療を受けるうえで「最後に行使できる権利」とも言えます。

今後の医療のさらなる進歩を実現するためにも、病理解剖の意義をご理解いただき、解剖の実施につきまして温かいご支援とご協力をいただければ幸いに存じます。

日本赤十字社医療センター 病理部